

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：34507

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370190

研究課題名(和文)メディアテクノロジー時代におけるアヴァンギャルド再考：山口勝弘の思考と表現

研究課題名(英文)The avant-garde reconsideration in the media technology era: A thought and expression of Katsuhiko Yamaguchi

研究代表者

八尾 里絵子 (Yao, Rieko)

甲南女子大学・文学部・准教授

研究者番号：10285413

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：我々は、老練の美術家となった山口勝弘の現在を追い続け、多くの知見を得る事ができた。調査を通して見える事は、飽くなき創造の世界を具現化しようとする山口の強固な信念の礎には「環境」があり、それは風化することなくさらに強さを増していることである。それに加え、老いや身体の不自由さをも創作の力に取り込む姿そのものが、山口の変わらぬ「前衛的精神」であり、表現せずにはいられない意をも持つ「アウトサイダー・アート」を体現していることがわかってきた。
本研究により、日本の前衛芸術を牽引し、メディアアートの先駆的存在である山口勝弘の新たな展開を発見したことで、継続調査の必要性を確認することもできた。

研究成果の概要(英文)：We get much knowledge because of investigating the present of Katsuhiko Yamaguchi who become an experienced artist. Through our investigation, we see that his firm belief is based on "environment" to embody his endless creative world and it is going to improve its strength.

In addition to that, the figure himself which takes old age and physical inconvenience in power of the creation is his "avant-garde mind" not to change of him. We know that he embodies by "outsider art", that is because he cannot help drawing and expressing.
By this study, we discovered new development of Katsuhiko Yamaguchi who was pioneer existence of the media art and led Japanese avant-garde art. And we were able to confirm the need of the continuation investigation.

研究分野：メディアアート、メディアデザイン

キーワード：山口勝弘 アヴァンギャルド 前衛的精神 メディアアート 環境芸術 アウトサイダー・アート

1. 研究開始当初の背景

我々は2010年頃より、メディアアーティスト山口勝弘から依頼を受けるかたちで、彼の作品制作に関する様々なサポートを行ってきた。高齢および病気の後遺症などにより、従来のように自由に作品制作を行うことが困難となった山口の構想を具現化することを目指し、『山口勝弘とイカロス展』(2010年)、『三陸レクイエム』(2011年)などの、複数の映像作品の実制作を担当してきた。特に11年度以後は、こうした取り組みをさらに深化させるべく、「テクノロジーアートにおける言説とメディア」というテーマを設定し(科研費基盤研究C採択課題, 課題番号23520195)、これまで以上に精力的に様々なプロジェクトに取り組んできた。そしてその成果として、2013年10月に山口にゆかりのある神戸芸術工科大学内のギャラリーを会場とし、作品展『回遊する思考: 山口勝弘展』を開催した。

この作品展は、2001年に病に倒れて以降表現スタイルを大きく変化させてきた山口の、現在進行形の表現活動を紹介する貴重な機会となった。特に近年、国内外で戦後日本の前衛芸術に対する関心が高まり、山口がかつて在籍した前衛芸術家集団「実験工房」や『ヴィトリヌス』などの山口作品も度々紹介されている。しかし、80歳を超えた今もなお表現活動を続ける山口の最新動向を知る機会はほとんどなかった。そこで我々が中心となり、歴史的な検証を中心とする従来の展覧会とは一線を画すものとして、本展を企画・開催したのである。

そこでは、数十点におよぶ絵画作品やオブジェと共に、iPad など最新のメディア機器や新素材を用いた新作が発表された。我々は病気の後遺症により自らの溢れ出るアイデアを新たな表現に落とし込むことが困難なアーティストをサポートしながら、それらの作品の構想段階から深く関わり、実質的な作品の制作作業を行っていった。

こうした活動の結果、山口から直接指示を受け実際に作品制作に関わった我々にしか知り得ない、貴重な知見を蓄積することができた。例えばそれは、山口の尽きることのないアイデアの絶対的な量やそれらが絶えず変化する思考のスピード、或いはその源泉についてである。山口が抱く漠然としたイメージの中には、時間・空間・メディアテクノロジーの融合から成る「環境」の概念が常に存在し、作品はそれを具現化するために適宜様々な手法を用いて生み出されたものである、という確信を得るに至った。

2. 研究の目的

本研究は、基本的にこれらの活動の延長線上に位置付けられるものである。そこでは、引き続きメディアアーティスト山口勝弘とその作品群を研究対象としながらも、研究領域のさらなる拡張と深化を目指して、特に以下

の二点について美学的な視点から考察を行うこととした。

その一つは、かつて山口が提唱・実践した「環境芸術」の概念についてである。山口は建築家のフレデリック・キースラーに傾倒し、1978年に著書「環境芸術家キースラー」を記している。そこでは「環境」を、メディアテクノロジーと人間をつなぐものとして位置付けている。しかし近年、環境芸術という語はしばしば「環境=エコロジー」という意味において解釈され、自然と一体化したランドアートやパブリックアートなどを想起させることが多い。山口は2000年に自らが発起人となって「環境芸術学会」を設立、初代会長を務めた。その設立趣意書には20世紀後半以来の情報技術革命の中で、「自然的環境と人工的環境のみならず、電子的環境に包まれているという、新しい人間の姿を確認しなければならなくなった」と記されており、元来環境芸術とメディアテクノロジーは常に密接に関係するものとして捉えられていたことが分かる。しかし前述したように、近年そうした概念と一般的な認識の間に少なからず乖離が見られる。本研究は、そうした現状に一石を投じるものとして位置付けられる。

そしてもう一つは、彼の表現の源泉とも言うべき前衛的精神についての考察である。山口は、戦後間もない頃から欧米の前衛芸術に強い関心を抱き、1950年代の実験工房の活動において自らその実践者となった。実験工房は、アートとテクノロジーの融合による(今日で言うところの)メディアアートの試みをいち早く実践したが、時に「早すぎた前衛」と称されるように、同時代のアートシーンにおいては極めて特異な突出した存在であった。しかし今日、現代アートの最前線としてメディアアートが大きな注目を集める中、その先駆的試みが再評価されている。実験工房以後も長年にわたり、現代アートの最前線で先駆的な表現活動を行ってきた山口は、時代ごとの状況の変化や自身の生活環境の変化に応じて、様々な表現スタイルを変化させ進化してきた。特に2001年に病に倒れて以降、その作風は劇的な変化を遂げるが、アーティストを志した若かりし日から抱き続けてきた飽くなき探究心は、今もなお衰えることがない。本研究では、そうした山口の表現の源泉とも言うべき「前衛的精神」について、現代アートの諸状況との関連をふまえ分析を行ってゆく。

3. 研究の方法

本研究の具体的な方法として、以下の三つの方向性を挙げるができる。一つ目はこれまでと同様に、山口とのコラボレーションによる作品制作作業を進めてゆくことである(実体験を元にした、より実践的な表現研究)。二つ目は、美術史的な文脈において山口作品を改めて定義付けするための、文献や作品資料調査である(客観的視点に立った調査研究)。

三つ目は、必要に応じてこれらの研究成果を外部の研究者らと情報共有し、新たなつながりを構築してゆくことである（研究成果の検証とフィードバック）。

一つ目の側面に要する手法は先行事例に沿うもので、山口と頻りに面談し日々の交流の詳細な記録を保管すること、現在の創作活動に直接的な補助を行うことが重要となる。それに加え今回は、個人及び他機関からの依頼を積極的に遂行することや、研究が意義あるものとして社会へ発信できるよう、様々な方法の検討を行った。いずれの場合も、共同研究者らで役割分担を決めるのではなく、ひとつひとつの案件に対して、ゆるやかな分担作業を行うことにした。それにより、調査内容を速やかに共有することができ、各々が適した役割で作業を行うことができた。

一方、二つ目の側面には現地調査が必要である。近年、国内外において多様なメディアアート作品が発表されているが、その作品のもつコンセプト、周辺環境と表現方法の関係、展示企画の意味等については、自身の体験に伴う現場での調査が必要となり、各所で調査を行った。

そして三つ目は、本研究と社会との連携を積極的に行うことである。これは、学会等で研究成果を発表するだけではなく、外部機関との建設的な関係性を結ぶ事により、分野の活性化を目指すことができる。例えば我々の役割として、美術館のからの要請に応え、企画に参画したりアドバイスしたりといったことである。

4. 研究成果

ここでは、我々が直接的に作品制作に携わることで発見した山口の表現の源泉でもある「前衛的精神」と、その制作過程や日常的な対話から垣間みる「環境芸術」の概念について具体的な事例を取り上げながら考察する。また、他機関との連携によって実現した研究課題の社会的活用について紹介し、本研究が有意義であったことを言明する。

(1) 「前衛的精神」の追求

これまでに幾度となく積み重ねて来た山口との共同作業から、「前衛的精神」を明示したといえる2016年度の成果を述べる。それは、山口と北市との共同作業による映像作品『Mount Fuji and Golden Cockroach -富士山とゴキブリ』（2016, 2分28秒）で、日本映像学会第42回大会で研究発表を行った。（図1）

今回はテキストや口述によって提示された構想を元に、北市がオペレーターの役割を担いコンテンツの制作を行った。制作のプロセスにおいては、可能な限り山口が想い描くイメージを忠実に再現することを目指した。その結果として、従来の山口作品とは一線を画す極めて斬新な映像作品が出来上がった。作品のクオリティということに関して言えば、特段新しい技術を用いている訳でもなく、非

常にプリミティブな装いを持った作品となっているが、こうした一種の「つたなさ」が、むしろ偉大な老メディアアーティスト山口勝弘の「今」を体現しているものである、と言えるのである。



図1 映像作品の一コマ

近年、アートの本流から外れた多様な人々の生の表現であるアウトサイダー・アートが注目されている。本作品も、こうした系譜に連なるものとして捉えることもできるだろう。老いや病氣と闘いながら、なおも強固な信念を持って表現と向き合う山口の姿は、まさに現代の「前衛」そのものであり、先の学会での発表においても、その意義が高く評価された。

(2) 「環境芸術」の再定義

次に、本研究においても一つの重要な視点である「環境芸術」について、近年の一般的な概念との間に生じたズレについて考察し、現在のメディアアート作品と照らし合わせながら、山口が提唱した「環境芸術」の再定義をおこなう。

① 「環境芸術」に対する社会とのズレ

美術界では1960年代半ば以降に「環境」が浮上し、それまでの絵画、彫刻、写真、デザイン、音楽などのジャンルの分別を打破し、光や色、音といった非実体的な「場」を作り出すことを目指す動きが見られた。榎木野衣著の『戦争と万博』（2005）によると、作品を鑑賞者が見るのではなく、「体験すること」が重視され、作品と鑑賞者との間にあった隔たりをなくす「環境」を作り出す事に、新しい美術としての意味を見いだしていたという。山口も1970年の大阪万博でチーフプロデューサーを務めた三井グループ館で、トータル・シアターとしてこの概念を実践した。その後これについて、従来の芸術経験と異なったコミュニケーションの体験を観客に与えることができたと言っている。ただし同時に、観客と作品との間のコミュニケーションについては、反省の弁をも述べている。

大阪万博前後の「環境芸術」に「環境＝エコ」の意味は内包していない。しかし時を同じくして、急速に進んだ環境破壊や公害問題を受け、国全体で環境保全や保護の機運が高まり始めたことで、エコロジーが台頭した。エコロジーは、自然の環境と調和しながらよ

り豊かな人間生活を営むことをめざす「エコ」として一般へ浸透し、誰もが実践できる「環境への取り組み＝エコ」として社会的共感を得たのである。

また、1996年には環境省が環境白書において「環境芸術」の2つの方向性、つまり「芸術の環境化」と「環境の芸術化」について報告している。特に後者では、元来芸術とは無縁である様々な環境を「芸術」と捉え、人々がくつろぐ自然や公共空間といった環境を要素とした作品が見られた。またそれに、自然の素材や廃材等を用いたエコロジカルな作品も加わり、それが「環境芸術」の主流であるとも捉えられた。このように本来の「環境芸術」とのズレは、その言葉自体が一般に普及する前に、国内外における環境問題への意識が向上し、「環境＝エコ」が先に定着したからであろう。

2000年、この流れに一石を投じる想いもあったのか、山口は自らが発起人となり「環境芸術学会」を設立する。その設立趣意書からは、一般的な「環境芸術」の認識とのズレの原因を読み取る事ができる。それは、私達が予測もしなかった速さで「電子的環境」に包まれてしまったことで、「環境芸術」のなかに当然含まれるべき「電子的環境」が、(まるでそれ自体がエコと対立関係にあるかのごとく) 零れ落ちてしまったことである。

②メディアアートにおける人間の表現

ここで、我々が「環境芸術」について再考する時、先述のような人間の生活環境に幅広く展示された芸術作品ではなく、個々の芸術作品のもつ環境的特性、つまり、時間・空間・メディアテクノロジーの融合からなる「環境」と人間とのコミュニケーションを、作品によって体験することを重視しなければならない。本調査ではこのような作品が体験できる場として、メディアアートの国際的な祭典「アルスエレクトロニカ」に何度か足を運んだ。毎夏、オーストリアのリンツ市で開催されるこの祭典は、毎年テーマを掲げ、アートとテクノロジーにおける社会的な問題点を浮き彫りにしてゆく。これまで訪問したなかで特に印象的なテーマに「人間性」(Human Nature, 2009)があり、そこでは「自然を再認識し、アートとテクノロジーと社会が相互につながる領域で生み出される対話」を目指すものであった。クリエイティビティで人間はどこまで拡張できるかを問うテーマは、山口の提言した「環境芸術」との親和性が高いと考えられた。

その他にもあらゆる所で多くの作品を調査してきたが、本研究期間中に体験した作品から、「環境芸術」を考察するに適した最新作品を件取り上げ、「環境」の位置づけについて再考する。

一つ目は、池田亮司の作品『data.tecture[3 SXGA + version]』(堂島リバービエンナーレ

2015)である。これは、情報化社会に溢れている可視あるいは不可視なデータを、可聴・可視作品とすることで、人間の想像力を超越する体験を提示した。作品の特徴は、およそ22×11mの巨大な暗闇空間に高速のデータビジュアライゼーションを投影し、そこで鑑賞者がどのように空間を体験してゆくかを問うものである。可視化されたデータがあまりに高速に描かれるその空間は、まるでデータの河川に巻き込まれ、沈み込むような感覚に鑑賞者を陥らせる。

二つ目は、ベルリンを拠点とするアート+コムと日本のライゾマティクスリサーチによる「光と動きの『ポエティクス/ストラクチャー』展(NTTインターコミュニケーション・センター, 2017)の展示空間そのものを取り上げる。ここでは、両者の作品に特徴的な「光と動き」という要素を、どのように表現するかという点を「ポエティクス」「ストラクチャー」という視点で作品空間を作り上げた。そこでアート+コムは、ダンスのようにゆるやかに動く色光とオブジェクトの作品を展開し、ライゾマティクスリサーチは、鑑賞者の位置情報とアルゴリズムを用いて、光とオブジェクトがゴトゴトと動く、両者共に人間味を感じさせる作品を発表した。

ここで池田の作品とアート+コム/ライゾマティクスリサーチの作品を「人間を表現する」という視点で比較する。その理由には、山口のテキスト「<実験工房>と美術の脱領域」(「実験工房と瀧口修造」, 1991)に「環境芸術」へのヒントが書かれていたからである。そのテキストには、20世紀後半の芸術家は、「機械を通して人間を表現する実験」に立ち向かわなければならない」という記述があり、機械(及び機械と密接である電子的環境)と人間の新たな関係性を認識する必要性が生じた現在、電子環境における人間を、どのように捉えるかについて試されている。前者の作品そのものには、人間らしさといったものは全く感じられないが、鑑賞者が電子的環境に身を置くことで生じる、人間の新たな感覚経験を認識することができる。一方、後者は、空間の中に作品という実体が存在していることもあり、その実体を用いた光と動きから、人間らしさや親しみやすさを感じることができるのである。

先の、山口の言葉を借りれば、20世紀後半以来の情報技術革命のまっただ中であるまさに今、「機械を通して人間を表現する実験」に挑戦するのは「環境芸術」の指名のうちのひとつであろう。ただ、今となっては「環境」という言葉で示すには、情報化社会の急激な進歩を前にして、限界が生じている事は明らかである。山口が伝えたかった「環境芸術」を、情報環境芸術あるいは、メディア環境芸術と換言することで、違和感を払拭することができる。

(3) 外部機関との連携の実現

本研究は、我々が山口の制作活動のサポートを行う事に重点を置いてきたが、研究を進めるにつれて、幸いにも、外部機関をはじめとする多くの人脈を得る事ができた。研究を社会へ還元する最も重要な方法の一つに人との繋がりがあり、本研究チームも美術館や関係者からの要請というかたちで、社会的な貢献を実現することができた。そのうち代表的な事例について紹介する。

① 個展『山口勝弘展-水の変容』の企画・展示アドバイザー、レクチャー『山口勝弘 1951-2014』での招待講演（横浜市民ギャラリーあざみ野, 2014）

担当学芸員の要請を受け、初期段階から企画に携わったが、これより前に我々が開催した『回遊する思考：山口勝弘展』（神戸芸術工科大学, 2013）の時点で、相互の協力関係を合意していた。この展覧会は、公的機関での久々の大規模個展であったため、我々も早くから参画し、作品の手直し、資料等の収集、展示アドバイス等、あらゆる内容について取り組んだ。また、展覧会期間中に開催するスペシャルレクチャーにおいて講演を行うと共に、山口本人を交えた正にスペシャルなレクチャーを実施するに至った。

② 企画展『MAM リサーチ 004：ビデオひろば -1970 年代の実験的映像グループ再考』（森美術館, 2016）のアドバイザー

担当学芸員の要請を受け、ビデオひろば時代の山口に関する資料や作品、所蔵物等についての調査に協力した。ここでは我々の方が資料調査に関するノウハウを学ぶこととなり、美術学芸員の鋭い調査力に注目した。

③ 2カ所のアトリエの調査（大井町・淡路市、期間中適宜）

関係者の要請を受け共同で数回に渡り内部調査を実施し、山口の作品群の現状を確認した。

またこれ以外にも、山口の基礎研究の入り口となるよう、インターネット事典Wikipediaにおいてはじめて「山口勝弘」の項目を執筆公開した。これにより現在、項目の追加や修正が随時行われることとなった。

(4) まとめ

我々は、老練の美術家となった山口勝弘の現在を追い続け、多くの知見を得る事ができた。調査を通していえる事は、飽くなき創造の世界を具現化しようとする山口の強固な信念の礎には「環境」があり、それは風化することなくさらに強さを増していることである。それに加え、老いや身体の不自由さをも創作の力に取り込む姿そのものが、山口の変わらぬ「前衛的精神」であり、表現せずにはいられない意をも持つ「アウトサイダー・アート」

を体現していることがわかってきた。

本研究により、日本の前衛芸術を牽引し、メディアアートの先駆的存在である山口勝弘の新たな展開を発見したことで、継続調査の必要性を確認することもできた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 北市記子、芸術とテクノロジーの関係性について、人間科学研究 第9号、査読無、2015、pp. 126-131
- ② 北市記子・八尾里絵子・門屋博、『回遊する思考：山口勝弘展』の作品群からみる創造性とテクノロジーの関係性について、環境芸術 第13号、査読有、2014、pp. 88-96

〔学会発表〕（計4件）

- ① 山口勝弘・北市記子、Mount Fuji and Golden Cockroach -富士山とゴキブリ、日本映像学会第42回大会、2016年5月、日本映画大学（神奈川県川崎市）
- ② 八尾里絵子、アヴァンギャルドの再検証～山口勝弘の周辺から、環境芸術学会第16回大会、2015年11月、京都嵯峨芸術大学（京都府京都市）
- ③ 北市記子、山口勝弘の初期作品『ヴィトリヌ』の起源に関する一考察、環境芸術学会第16回大会、2015年11月、京都嵯峨芸術大学（京都府京都市）
- ④ 北市記子、イメージの桃源郷-山口勝弘とナム・ジュン・パイクの晩年における創造的行為、日本映像学会第40回大会、2014年5月、沖縄県立芸術大学（沖縄県那覇市）

〔招待講演〕（計1件）

- ① 八尾里絵子・北市記子、『山口勝弘展-水の変容』レクチャー 山口勝弘の新作について 2013-2014、2014年11月、横浜市民ギャラリーあざみ野（神奈川県横浜市）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

八尾 里絵子 (YAO, Rieko)
甲南女子大学・文学部・准教授
研究者番号：10285413

(2) 研究分担者

北市 記子 (KITAICHI, Noriko)
大阪経済大学・人間科学部・准教授
研究者番号：90412296

門屋 博 (KADOYA, Hiroshi)
相模女子大学・学芸学部・教授
研究者番号：80510635